

令和2年度 後期 南中学校学校評価資料

2月作成

○短期経営目標 ☆本年度新たな取組 ◇取組状況 ◆成果 ●課題

中期目標 a 「教師の授業力向上（教師→教師）」 について

評価 **B**

○生徒主体の学び・深い学びの場がある授業実践を積み重ねることで、「学び合い」の質を高め、「学び合い」を通して学ぶことの達成感・充実感を感じさせる。

方策1 主題研の4部会毎に「学び合い」の視点で主題に沿った単元を構想し、授業実践する。

◇部会研究授業 および 研究協議会

・2月5日（金）織田 楓 教諭
1年3組 家庭科「地球のために 未来のために ～衣服の手入れを通して～」
関係教科部会 … 技術家庭科、英語科、理科

・2月5日（金）池谷 奈菜 教諭
1年1組 美術科『『Number17A』を見て考える抽象表現の魅力』
(兼 高浜市授業づくり研修 講師 高浜市立高浜中学校 近藤陽子 教諭)
関係教科部会 … 美術科、国語科、保健体育科

◆部会研究授業の指導案検討会、授業後の研究協議会など、部会長を中心に主体的に運営がされていた。これは、研究主任による部会長への丁寧な声かけ支援や、必要に応じて開催される部会長会議での学校としての研究推進方針を何度も再確認する中で、各部会長に自覚をもたせていったからだと考える。令和4年度に発表会は延期されたが、実践の積み重ねは次年度早々始めねばならない。本校が目指す授業づくりの方向性や生徒像を全職員で共通理解するために、研究主任一人で訴えるのではなく、部会長、そして教科主任が担当職員の授業づくりに積極的に関わっていく雰囲気が必要である。そう考えると、年度終わりの部会長の働きは、確実に次年度の実践、再来年度の発表会へとつながっているものとする。

●上に記したことを意識し、一人一人の授業づくりの質的向上を図るためには、4部会と教科部会の連動が必要不可欠となる。その具体的な方策は前期まとめに記してあるので、それを確実に引き継ぎ、具現化していくことで、次年度の研究推進に反映していきたい。

方策2 集団で課題を解決する場のある単元構想を構築するために、生徒の思考の流れを汲んで、追究課題を意図的に配列する。

【教師アンケートの結果】

【生徒アンケートの結果】

問5. 生徒が自分の考えに理由や根拠をもてるような課題を示した授業づくりをしているか。

	前期	後期
あてはまる	4%	23%
まあまああてはまる	61%	60%
合計	65%	83%

問5. 自分の考えを言うとき、その理由や根拠をもっていますか。

	前期	後期
あてはまる	35%	36%
まあまああてはまる	40%	50%
合計	75%	85%

アンケート結果

(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

◆多くの職員が、自身の授業づくりを機に『学び合い』の授業とはどのような授業なのか」という視点で、同僚の公開授業を積極的に参観したり、同教科の同僚に相談したりして、授業における生徒同士の「かわり」の位置づけや必要性について、しっかり考えられるようになってきた。そのような授業者の意識の向上が、学習者である生徒にも伝わっていることがアンケート結果からも分かる。

●本校の主題である「学び続ける」を意識した生徒の思考の流れに必要な教師の働きかけはどのようなものなのかをさらに意識し、「活動あって学びなし」のような一時的・表面的なかわりにならぬよう、生徒たちが「集団で課題を解決すること」におもしろさを感じ、「学び続ける」ことへつなげていけるような授業づくりを目指していきたい。

方策3 「学び合い」の質を高めるために、生徒の思考を支える発問・板書の工夫をしたり、対話の質を高める働きかけの工夫をする。

【教師アンケートの結果】

【生徒アンケートの結果】

問 8. 自分の考えと友達のことを比べる場面
を授業の中に設定していますか。

	前期	後期
あてはまる	22%	20%
まあまああてはまる	52%	49%
合計	74%	69%

問 8. 考えを伝え合う場面では、友達のことを
と自分の考えを比べて聞いていますか。

	前期	後期
あてはまる	27%	26%
まあまああてはまる	41%	48%
合計	68%	74%

アンケート結果

(はい、概ねの合計値)

- A: 80%以上
- B: 70%以上**
- C: 60%以上
- D: 59%未満

◆「考えを伝え合う場面」があれば、生徒たちは仲間の考えと比較しながら聞こうとしていることが分かる。自分の考えが適切であるのかどうかを確かめるために仲間の考えを聞く場合もあるし、仲間の表現の仕方や学び方などを参考にするために聞く場合もあることが、生徒の授業後の振り返りの記述からも分かった。

●上のことから、授業者は学習場面の中に、考えを伝え合う場面を意図的に設定していきたい。しかし、授業者がその場面をどのようなねらいで設定しているのかを明確にしないままでは、生徒の思考の流れがつかないばかりか、生徒間の交流の質も高まらない。授業者は、この単元を通して、生徒にどんな力をつけたいのか、そのために、単元のどこで、どのような流れで、その場面を位置づけるのか、しっかり考えて授業づくりに臨んでいきたい。

方策 4 授業参観者用シート、「授業だより、授業メモ」で南中の目指す授業を示し、相互参観・執筆を通じて授業力を高める。

◆「授業だより、授業メモ」の執筆者は、参観時にさまざまな視点で授業を分析的に見ることができている。その分析で見えてきたことを全教員に配付する中で、1年学年主任は、自らが大切だと感じた部分に蛍光ペンでラインを引き、学年職員掲示板に見えるように掲示し続けた。さまざまな授業を通して見えてきた大切なことを、学年全体として意識して働きかけ、生徒に力をつけていこうとの思いが伝わってきた。授業だよりの活用方法の一つとして実践していた。

●「授業参観者用シート」「授業だより」「授業メモ」の取組状況は定着してきている。しかし、南中学校が目指す授業や生徒像に迫るものであったかどうかを図る手立てになっているかどうかは課題がある。研究部が提示する五つの手立てを観点に参観・分析するとか、授業の中に生徒の学び続けようとする姿が見られたかどうかを観点に参観・分析するとか、シートやメモの取組のねらいについて再考していきたい。

中期目標 b 「学級経営力の向上 (教師→生徒)」 について

評価 **B**

○級訓を核とした学級経営を行い、個々の個性を生かしながら、集団の目標に向けて協働しようとする生徒を育てる。

方策 1 学年訓や学級訓をもとに室長会を柱に据え、生徒が自分で考え、行動できるようにする。

【教師アンケートの結果】

【生徒アンケートの結果】

問 13. 級訓や学級目標を達成できるように学級
経営ができていますか。

	前期	後期
あてはまる	13%	16%
まあまああてはまる	57%	63%
合計	70%	79%

問 13. あなたは、学級の「級訓」「目標」を意
識して生活できていますか。

	前期	後期
あてはまる	20%	21%
まあまああてはまる	41%	50%
合計	61%	71%

アンケート結果

(はい、概ねの合計値)

- A: 80%以上
- B: 70%以上**
- C: 60%以上
- D: 59%未満

◆担任と生徒との意識の差はあるものの、学級対抗の学校行事の取組はもちろん、委員会活動や室長会企画等を通して、生徒自身が自分の学級についてさまざま考えたり振り返ったりする機会が増えたと考える。年間を通じて、集団生活の中でいかにして協働的な行動を取ることを大切さを気づかせていくのか、見通しをもって計画的に各種特別活動を機能させていくことは有効であることが明らかになった。

●担任自身が学級経営案に基づき、年間の見通しをもって日頃から機会ある度に学年訓・学級訓を意識した場面を意図的に設定し、生徒にも意識できるように仕掛けていきたい。

方策2 応援合戦、合唱コンクールをはじめ、学校生活全般において級訓を意識した取組、振り返り、評価を行う。

【教師アンケートの結果】

問 14. さまざまな行事に対して、生徒が協力し合えるような支援・指導ができていますか。

	前期	後期
あてはまる	26%	32%
まあまああてはまる	43%	68%
合計	69%	100%

【生徒アンケートの結果】

問 14. あなたの学級は、さまざまな行事に役割を決め、みんなで協力していますか。

	前期	後期
あてはまる	42%	50%
まあまああてはまる	41%	42%
合計	83%	92%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

◇合唱コンクール後の振り返りでは、級訓(学級目標)を意識したものが見られた。2年生の振り返りシートには、「学級目標()と照らし合わせて」の項目があり、2年4組の生徒は学級目標「期待草」をふまえて、以下のように記述していた。

・「種」からなかなか「芽」が出ず、苦しい時間が長かったけど、周りの人から少しずつ刺激をもらって、ゆっくりだけど成長していくことができた。最後は、関わってきた人たちから「期待」されるクラスまでになった。
 ※2年4組の級訓「期待草」には、【「楽しい」「協力」「努力」をキーワードに周りから得られた期待をエネルギーにして、力強く育つ草のように成長することをめざす】という思いが込められている。
 また、「合唱コンクールを通して成長したこと」として、以下のように記述していた。

・クラス全体で2-4の伸びがすごいことに気づきました。たくさんの壁にぶつかってまとまりのない状態から少しずつみんなで壁を破って行って最後は一体感に包まれた2-4、その状態にまでもっていったのが成長かなと思います。

☆特別な支援を要する生徒への支援・指導体制の確立・充実

方策3 不登校生徒の現状と指導方針を共有し、学校復帰、学級復帰に向けた支援をみなみ部会を中心に組織的に展開する。

【教師アンケートの結果】

問 25. 生徒たちは学校に来るのが楽しいと感じていますか。

	前期	後期
あてはまる	17%	23%
まあまああてはまる	74%	74%
合計	91%	97%

【生徒アンケートの結果】

問 25. 学校に来るのは楽しいですか。

	前期	後期
あてはまる	44%	54%
まあまああてはまる	33%	34%
合計	77%	88%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

問 12. 自分が教科で担当する学級をけじめのある学級になるように指導していますか。

	前期	後期
あてはまる	26%	32%
まあまああてはまる	65%	65%
合計	91%	97%

問 12. 自分の学級は、授業中、けじめのある学級だと思いますか。(人の話を聞く、授業に真剣に取り組む等)

	前期	後期
あてはまる	19%	20%
まあまああてはまる	46%	55%
合計	65%	75%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

【教師アンケートの結果】

問 37 要支援生徒(発達障がい・不登校・外国籍)への指導・支援を担当者(CD、SS、SC、)

【教師アンケートの結果】

問 38. 要支援生徒(発達障がい・不登校・外国籍)に対する情報を共有し、適切な指導・支援を行っている

通級担当等)と協力して行っていますか。		
	前期	後期
あてはまる	35%	31%
まあまああてはまる	57%	66%
合計	92%	97%

ますか。		
	前期	後期
あてはまる	35%	29%
まあまああてはまる	52%	63%
合計	87%	92%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

◆「問 25」について、前期に比べ、担任も生徒も意識が高まっていることが分かる。これは、担任にとつては学級づくりに手応えを感じ、生徒にとっては学級内の人間関係や雰囲気が心地よいと感じているからであると考え。担任が常日頃から学級一人一人の様子をつかみ、細やかな支援を継続してきたからその姿と言える。

●「問 12」については、共に高まりが見られるものの、教師と生徒の意識に未だ広がりが見られる点は、真摯に受け止めなければならない。この意識のずれは、研究推進の観点においては、「学び合い」に欠かせない生徒同士で作り上げる温かな学習集団構築に支障を来すことになりかねない。さらには、教師と生徒との信頼関係という観点においては、学校生活の中で何よりも安心・安全を保障すべき「授業時間」で学習規律の有無や学習集団としての温かな雰囲気の有無は、生徒にとって安心安全に過ごすことができる学校であるかどうか直結するからである。

◎不登校の状況と対応
 ◇【出席率・無遅刻率】(令和2年11月～1月)

出席率	97.7%
無遅刻率	97.5%

A: 98%以上 B: 97%以上
 C: 96%以上 D: 96%未満

◇「不登校」を理由に30日以上欠席している生徒の内訳は以下の通りである。

前期	合計15名	1年生…9名	2年生…4名	3年生…2名
1月末現在	合計20名	1年生…13名	2年生…4名	3年生…3名

「不登校」を理由に30日以上欠席している生徒の出現率(令和3年1月31日現在)

3.40%

◆これらの生徒に対しては、前期から引き続き、みなみ部会(校内不登校対策委員会)で対応と対策を話し合い、担任を中心に家庭訪問、保護者相談を密に行い、本人・保護者との関係を築きながら登校に向けた働きかけを行っている。また、みなみ教室、通級指導教室、市の適応指導教室への通級の適否を検討して、何人かにおいては現在教室復帰に向けたつなぎができています。

●学校不適応の原因が多様化している。これまで我々も経験したことのない分野もあり、より専門的な知見が求められている。個々に応じた適切な対応ができるように研修を充実させる必要がある。

◎みなみ教室(不登校生徒適応教室)の状況と対応

◇昨年度、みなみ教室に登録していた生徒のうち、引き続き登録している生徒の内訳は以下のとおりである。

合計7名	1年生…4名	2年生…0名	3年生…3名
------	--------	--------	--------

◇現在、みなみ教室に登録している生徒の内訳は以下のとおりである。

合計15名	1年生…5名	2年生…5名	3年生…5名
-------	--------	--------	--------

◆昨年度に比べて、利用生徒が増加し、個々の生徒が抱える問題は多岐にわたるが、担当教員のきめ細やかな指導・支援により、脱引きこもりや教室復帰に向けて着実に前進している様子が見えてくる。

方策4 通級指導のあり方を検討し、実態に即した支援体制を確立する。

◎通級指導教室の状況と対応

◇昨年度、通級指導教室に登録していた生徒のうち、引き続き登録している生徒の内訳は以下のとおりである。

合計 3 名	1 年生… 0 名	2 年生… 2 名	3 年生… 1 名
--------	-----------	-----------	-----------

◇今年度、通級指導教室に登録している生徒の内訳は以下のとおりである。

合計 1 0 名	1 年生… 7 名	2 年生… 2 名	3 年生… 1 名
----------	-----------	-----------	-----------

◆現在、通常学級において、他者との関わりづらさを感じる生徒が親に打ち明けたことを機に、保護者と担任との教育相談、担任から学年主任、みなみ部会、そして通級指導教室へのつなぎという流れができつつある。担当者の入り込み観察を経て、いよいよ通級取り出しに向けて、本人との面談を進めている。このように、一人一人を大切に、個々の状況に細やかな対応ができる体制が確立しつつある。

方策 5 外国籍生徒の現状を把握し、日本語指導教室担当を中心に、市通訳、SSを活用しながら細やかに対応する。

◎日本語指導教室の状況と対応

◇本年度より、日本語指導教室が 2 教室開設された。

◇日本語指導教室に登録していた生徒のうち、引き続き登録している生徒の内訳は以下のとおりである。

合計 2 1 名 () …取り出し授業	1 年生… 1 3 名 (8 名)	2 年生… 5 名 (3 名)	3 年生… 3 名 (2 名)
-------------------------	-----------------------	---------------------	---------------------

◇日本語指導が必要と思われる生徒に対し、日本語指導や教科指導、日本の学校生活における指導・支援を行った。

◆3年生に1名の外国籍生徒が支援を受けているが、進路選択にあたり面接や作文の練習を行うなど、適切な対応ができた。

◆本年度から始まった日本語指導教室は、該当生徒の日本の学校で生活することへの不安を解消し、安心・安定を図るだけでなく、職員会議の中で担当教員が現状報告を行うなど、職員が共通理解できる取組も行っている。本年度の取組により軌道に乗ったと言えるので、次年度からは、より効果の上がる指導・支援を探っていく。

●通訳が必要な生徒は、まだ今後も支援が必要である。次年度も、ポルトガル語対応のスクールサポーターを配置し、通訳支援を受けながら指導にあたるようにしていく。

中期目標 c 「集団の中で生徒自身が課題を発見し解決する力の向上
(生徒→生徒)」 について

評価 **A**

○「生徒自治」の精神を継承・発展させ、学校生活全般にわたって、リーダーを中心に生徒主体で計画・運営・評価しながら活動できる機会・場を保障する。

方策 1 生徒議会・生徒総会の質を高め、室長会や委員会との連携を強化することで、生徒スローガンと全体計画をふまえた活動にしていく。

【教師アンケートの結果】

【生徒アンケートの結果】

問 20. 委員会、生徒会活動等、生徒の意見を反映した取組を実践していますか。

	前期	後期
あてはまる	9%	26%
まあまああてはまる	78%	66%
合計	87%	92%

問 20. 委員会や生徒会活動に積極的に参加したり、協力したりできていますか。

	前期	後期
あてはまる	29%	36%
まあまああてはまる	30%	38%
合計	59%	74%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

●アンケート結果には、指導する教師と活動する生徒との意識が共に高まっており、さらに、本校生徒が委員会や生徒会活動に積極的に協力する雰囲気ができていることが分かる。その一方で、委員会や生徒会活動に対して、どれだけ自分たちの意見を自分事として伝えられているのかは知ることはできない。次年

度は、前期のまとめにも書いたように、生徒会活動の質をより高めていくために、生徒が自分たちの学校生活をより楽しく、より豊かにするために、何が必要で、どうしたら実現できるのか、自分たちで考え、判断し、全校に協力を呼びかけている実態を把握できる調査の仕方についても再考していきたい。

方策2 生徒会活動や室長会に関して、担当職員が「ファシリテーター」としての役割を再自覚し、「生徒自治」の精神を継承・発展させていこうとする考えに基づいて支援していく。

【教師アンケートの結果】

問 29. 個々の生徒やチームに目標をもたせて活動できるような支援・指導ができていますか。		
	前期	後期
あてはまる	13%	17%
まあまああてはまる	70%	77%
合計	83%	94%

【生徒アンケートの結果】

問 29. 自分やチーム（部活動）の目標をもって活動していますか。		
	前期	後期
あてはまる	45%	53%
まあまああてはまる	32%	34%
合計	77%	87%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

◆アンケート結果から、前期に増して教師と生徒が目標に向かって活動している姿がうかがえる。また、ほとんどの生徒が高い意識をもって活動していることから、教師が何らかの手立てを講じて支援指導をしていることを感じることはできる。

●前期のまとめにも書いたが、目標をもたせることはできても、それに迫らせるための支援・指導の具体まではここからはつかめない。主目標の達成に向けた段階的な目標の設定ができているか、および振り返りが確実にできているかという点については、「ファシリテーター」としての役割の視点から結果を見ることができるようになっていく必要がある。

方策3 学年目標の達成に向けて室長会を運営し、決定した諸取組を学級へと広げていく。

【教師アンケートの結果】

問 23. 担当する学年は、室長会を中心にした活動ができるように指導がされて（指導をして）いますか。		
	前期	後期
あてはまる	35%	32%
まあまああてはまる	43%	59%
合計	78%	91%

【生徒アンケートの結果】

問 23. あなたの学年は、室長会を中心にした活動がされていますか。		
	前期	後期
あてはまる	39%	58%
まあまああてはまる	42%	36%
合計	81%	94%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

問 24. 担当する学年は、室長会の呼びかけや活動に積極的に参加できるように指導がされて（指導をして）いますか。		
	前期	後期
あてはまる	22%	27%
まあまああてはまる	61%	67%
合計	83%	94%

問 24. あなたは、室長会の呼びかけや活動に積極的に参加していますか。		
	前期	後期
あてはまる	29%	45%
まあまああてはまる	45%	43%
合計	74%	88%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 D: 59%未満

◆後期には、学校行事を充実させるための取組や年度末の学年・学級納めに向けての取組に関する室長会が随時行われており、室長を中心に学年を動かすという意識も実績も満足できる段階である。また、当日の運営だけでなく、企画・準備の段階から生徒の手に委ねられている面も多く見られ、リーダーを養成するという点からも効果を上げている。

方策4 外部団体、小学校と連携したリーダー研修会を運営し、部長会へつなげる。

◇今年度は実施できなかったもので、次年度は昨年度のふり返りや課題等をふまえて、質の高い取組となるようにしていきたい。

中期目標 d 「まちづくりへの協働力・貢献力の向上（地域⇄生徒）」 について 評価 **B**

○まちづくりへの生徒の主体的なかかわりの場を保障し、地域と協働して活動する中で、地域の一員としての自覚を高める。

方策1 生徒会や美化委員会が、街路樹ボランティア活動、防災訓練を計画・運営・参画する。

【教師アンケートの結果】

【生徒アンケートの結果】

問 32. さまざまなボランティア活動に生徒が参加できるように積極的に呼びかけや働きかけをしていますか。

	前期	後期
あてはまる	13%	9%
まあまああてはまる	30%	46%
合計	43%	55%

問 32. 様々なボランティア活動に参加しよう、参加したいという気持ちはありますか。

	前期	後期
あてはまる	19%	28%
まあまああてはまる	34%	44%
合計	53%	72%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

問 33. 生徒がボランティアの意義を理解し、与えられた活動以外にも自ら活動に向かうように指導していますか。

	前期	後期
あてはまる	4%	3%
まあまああてはまる	35%	57%
合計	39%	60%

問 33. ボランティア活動に参加したことはありますか。

	前期	後期
あてはまる	43%	65%
まあまああてはまる	19%	16%
合計	62%	81%

アンケート結果
(はい、概ねの合計値)
A: 80%以上
B: 70%以上
C: 60%以上
D: 59%未満

●前期のまとめにも書いたとおり「自分たちで学校生活を豊かにしていきたい」という自発的な意思に基づく自主的な活動がしやすくなるように、教師自身がボランティア活動の意義を再確認し、どのようにしたら生徒たちが自分事として捉えるようになるのか話し合っていきたい。

方策2 本校がさまざまな地域の支援者に支えられていることを教職員が自覚し、まちづくりへの協働の意識をもち「まちづくり」の一役を学校としてどう担っていけるかを考察する場を保証する。

●次年度は、生徒が地域貢献活動により多く参加できるように、地域との情報交換を密にするとともに、活動したことを積極的に発信し、地域への理解促進と生徒の成就感につなげていきたい。

方策3 ホームページ、ブログ等で学校の方針、活動のねらいと生徒の様子を積極的に情報発信する。

【教師アンケートの結果】

【生徒アンケートの結果】

問 34. 保護者や地域の方が見たくなるような情報を学校のホームページやブログに載せていますか。

	前期	後期

問 34. 学校のホームページやブログを見ますか。

	前期	後期

アンケート結果

あてはまる	13%	9%
まあまああてはまる	35%	42%
合計	48%	51%

あてはまる	14%	15%
まあまああてはまる	22%	25%
合計	36%	40%

(はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 (D) 59%未満

【保護者アンケートの結果】

◇ブログ閲覧者数(11月～1月)
 1日平均 133.7

A: 1日平均200以上 (B): 100以上 C: 100未満

問17. 学校のホームページやブログを見ているか。

	前期	後期
あてはまる	18%	22%
まあまああてはまる	34%	37%
合計	52%	59%

◆後期は、生徒や保護者のホームページの閲覧数が微増していることが分かる。これは、後期に大きな学校行事が開催されたことが関係していると考えられる。

●学校行事だけでなく、日常の学校生活においても保護者が学校に興味をもてるような情報を発信できるように、生徒にも保護者にも魅力ある活動を展開していきたい。

方策4 スマホ対策講演会やリーダー研修会において地域と協働する機会を継続する。

◇スマホ対策については、今年度も入学説明会の折に保護者、新1年生生徒を対象にした講演を予定していたが、コロナウイルス感染拡大防止のため、入学説明会を中止にし、各小学校において説明資料配付とした。

☆ 勤務時間縮減に向けた取組の推進

方策1 業務改善委員会を立ち上げ、職員自らが業務を見直し、削減・縮減の提案をする。

◇第2回の業務改善委員会を職員会の中で開催した。次年度から定められる「1か月45時間」に向けて自分事として捉えていかねばならないことを伝えた。そこでは、行事や業務の精選だけでなく、その行事や業務にどのような工夫のある取り組み方をして削減・縮減につなげていくか、職員の考えを募った。次年度の業務改善につながる提案がいくつかあったので、それらを具現化できるように調整し、職員に周知させていきたい。

【教師アンケートの結果】

	前期	後期
あてはまる	22%	17%
まあまああてはまる	39%	57%
合計	61%	74%

	前期	後期
あてはまる	13%	3%
まあまああてはまる	22%	32%
合計	34%	35%

アンケート結果
 (はい、概ねの合計値)
 A: 80%以上
 B: 70%以上
 C: 60%以上
 (D) 59%未満

◇業務改善委員会 第2回 1月22日開催 第3回 2月22日開催 提案数10件
 実施回数 A: 3回以上 (B): 2回 C: 1回 D: 0回
 提案数 A: 20以上 (B): 10以上 C: 5以上 D: 4以下

●個人レベルでは業務改善につながる取組を意識していることが分かるが、組織の一員として周りへの働きかけが低い。まずは機会ある度に推進委員会から取組の提案をしたり、提案の募集をしたりして、職員一人一人がいつでも誰にでも気軽に業務改善に関する話題を出せる雰囲気作りに努めていきたい。

◇職員の在校時間 11月～1月 平均在校時間数 52時間47分

方策2 地域団体の代表者やPTA役員等を通じて、地域や保護者に学校の実情を発信し、勤務時間縮減の取組について理解の促進を図るとともに、協働して取組を推進する。

◇マスコミ等の報道により教員の長時間労働が広く認知され、勤務時間縮減について地域や保護者の理解が得られやすい環境が整ってきている。次年度から始まる「1か月45時間」についてもPTA役員会等で話題に出し、学校行事の短縮や部活動の縮小等について理解を図る基盤を築いていく。